

教育ボランティアを通じた実践的教員養成のあり方に関する研究
—— 小学校との連携に着目して ——

Research on Methods to Train Teachers to Be Effective in Practice
— Focusing on Collaboration with Elementary School —

吉井 美奈子, 和田 博之

YOSHII Minako, WADA Hiroyuki

武庫川女子大学大学院 教育学研究論集

第 18 号 2023 年

教育ボランティアを通じた実践的教員養成のあり方に関する研究

—— 小学校との連携に着目して ——

Research on Methods to Train Teachers to Be Effective in Practice — Focusing on Collaboration with Elementary School —

吉井美奈子*, 和田博之**

YOSHII Minako*, WADA Hiroyuki*

要旨

本研究では、教員を目指す若者が学校現場で教育ボランティアを経験することで、彼ら自身にどのような影響や変化があるのか、また、教員になった後、そのボランティア経験がどのように影響するのか、更に教育ボランティアを受け入れた学校側には、何かしらの影響があったのかどうかについて明らかにすることを目的として、教育ボランティアを経験し教諭になった若者と、彼らを受け入れた管理職に対するインタビューを行った。

その結果、当初のきっかけは些細なものであっても、定期的なボランティア経験によって子どもたちとの距離が縮まるだけでなく、小学校教員らを支援出来ていることのやりがいを感じていたことが明らかになった。また、教育ボランティアを受け入れた学校側では、ボランティアの若者からの刺激が相乗効果を生み、学校全体の雰囲気が良い方向へ向かうと同時に同僚性の構築に繋がっていた。

キーワード：小学校との連携，ボランティア，実践教育，教員養成

1. はじめに

近年、教員を目指して進学しても教員への希望を失ったり、教員になったとしても指導力不足が指摘されたりすることが課題としてあがることが多い。特に、教員不足は深刻で、文科省による「教員不足」に関する実態調査（2022）でも、臨時的任用職員等を含めても不足した教員数は令和3（2021）年度4月1日時点で2千人（0.35%）を超えていた。^{注1}採用計画については、長期雇用計画等も検討されているが、団塊の世代の退職等もあり、今後も教員の担い手が不足する事態は避けられない。

教員を目指して進学してきた学生らが教員以外の仕事を選択して卒業していく理由の一つに、教員の仕事負担が多いイメージや、教員の仕事に対する漠然とした不安等が挙げられる。また多くの場合、教育実習で実際の学校教育現場に触れるが、その実習先での経験が良くも悪くも大きく影響していることも否定できない。

保住（2007）は、教員養成におけるボランティアの有用性について、教職に対する強い情熱と教育の専門家としての確かな力量、子どもたちや他の人々を思いやる心やコミュニケーション能力を身につけることが重要で、ボランティア活動の実践がその一助になることを福祉施設における福祉学習サポーターモデル事業として実践した報告をあげている。ここでは、福祉を keyword とし、児童ら（小学校5, 6年生）に、高齢者との触れ合いを

通して福祉の大切さを伝えたり、交流の場に関わったりする形で大学生が参加している。他には、後藤（2003）や高田ら（2017）の示した実践では、大学とその周辺にある小学校等の地域教育での事例が示されており、大学と小学校や、大学と教育委員会が連携しながら組織的に実践されている学生の様子が報告されていた。

これらの実践事例にも示されているように、教員養成における学校現場での経験が、学生自身のスキルアップに繋がると考えられているケースは多い。また、教員採用試験における提出書類や面接では、ほとんどの自治体で学習支援等のボランティア経験等を尋ねるものがあり、実際に教員養成の授業の一環としてボランティア活動を位置づけている大学もある。^{注2}

一方で、研究としては殆ど見られないが、(一社)lightfulが実践しているような次世代教員養成プログラム

「TEST」のように、^{注3}学生のボランティアが学校現場の負担軽減に繋がり、学生は現場での学びと経験を培うことで教員としての素養を育めると明確に打ち出しているプログラムも存在する。実践的教員養成として、教育ボランティアを行うことは、学生や教員を目指すもののスキルや意識の向上だけでなく、学校現場においても良い影響を与え、ひいては子どもたちが楽しく学べる学校づくりに繋がるのではないかと考えた。

これまで挙げたように、いくつかの先行研究では、多

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

** 高槻市立五領小学校 (Takatsuki City, Goryo Elementary School)

くの場合、授業の一環やプログラムの一環としてボランティアを経験した大学生の感想文を中心に、そのプログラムの成果についてまとめられている。一方で、その学校ボランティアに携わった学生らの変化を個別に分析した研究は見受けられず、その学生らが卒業後教員になったのかどうか、また、教員になったとすればボランティアとしての経験がどのように役立ったのかについても明らかになっていない。加えて、学生にとっての利点には着目されているが、TESTの活動で提示されているように、学校現場との連携について、ボランティアを受け入れた学校側の意見をまとめたものは見つけられなかった。

そこで本研究では、教員を目指す若者が学校現場でボランティア経験をすることで、彼ら自身にどのような影響や変化があるのか、また、実際に教員になった場合、それらのボランティア経験がどのように影響したのかを明らかにする。更に、教育ボランティアを受け入れた学校側には、何かしらの影響があったのかを確認することを目的とする。

なお、本研究では学校現場で行うボランティア活動を「教育ボランティア」とするが、文の流れによっては「ボランティア」という文言のみで表現することもあることを付記しておく。

2. 研究方法

本研究で実施した調査は、以下の通りである。また、教育ボランティアを実施した学校の管理職へもヒアリング調査を実施し、教育ボランティア実施者と受け入れた学校側の両面から把握することを試みた。

(1) 調査期間と方法

2022年7月に、大阪府内の公立小学校で教育ボランティアを経験した若者に対し、Zoomを活用した遠隔によるヒアリング調査を実施した。ヒアリング調査は、半構造化面接法により実施し、被験者1名に対して、調査者2名で対応した。本人の許可を得てZoomを録画し、逐語録を作成した。

また、これらの結果を基にして論文投稿(2022年10月)までの期間に、複数回にわたり教育ボランティア実施校の管理職への文面による聞き取りと、Zoomを活用したヒアリングを実施した。

ヒアリング調査にかかった時間は、管理職も含め1人あたり40分～1時間程度であった。なお、本調査の実施については、調査協力者に対して使用目的、論文投稿先、いつでも不利益なく断れること等を伝えた上で、協力を得ており、協力者と執筆者に利害関係はない。よって、研究倫理規定に抵触するものではないと判断した。

(2) 調査対象者

調査対象者の属性と経験については、表1に示した通りである。複数の小学校でボランティア活動をした経験をもつ対象者もいるが、本調査では、主にE小学校での経験を中心に尋ねている。近年では、学生ボランティアを受け入れている小学校も増えているが、対象としたE小学校では、大学のボランティア単位等での参加ではないこと、調査協力者でもある管理職が受け入れ依頼から担当振り分け、実施までを引き受けており、長期に渡る状況が把握できること等から分析に適していると考えた。

表1 ヒアリング調査対象者の属性と経験等(カッコ内はボランティア期間)

対象	年齢	性別	経験等
A	20歳代	男	私立大学卒業後、民間会社へ就職。その後通信教育で教員免許を取得。教員免許取得時にE小学校へ依頼し、ボランティアをするきっかけとなった。学童保育所でのアルバイト経験も有り。(2021-2022)
B	20歳代	女	私立大学教育学部卒業。大学3年生時にE小学校とF小学校でのボランティアを開始。F小学校のボランティア活動では、主に放課後学習教室が中心であった。(2019-2021)
C	20歳代	女	私立大学教育学科卒業。大学2年生時に大学の近くにあるG小学校で授業の一環としてボランティアを経験。その後、E小学校で教育実習とボランティアをした。(2020-2021)
D	20歳代	男	私立大学卒業後、通信教育で教員免許を取得。通学していた大学でも教員免許は取得できたが、在学中に教員への意欲が冷め、大学3年生で2週間の学校でのインターンシップを経験したことで、教員になる意欲が再度湧いた。(2021)
管理職	40歳代	男	教頭4～6年目の年度。E小学校は着任1～3年目での受入れであった。E小学校着任以前、別の小学校でも、教頭としてボランティアの受け入れの経験有り。

※年齢はインタビュー当時

E 小学校でのボランティア活動期間は 2019～2021 年度の 3 年を対象とし、この期間に教育ボランティアとして参画していた学生（通信教育生を含む）らにヒアリング調査を依頼した。調査対象者である管理職は、これらの教育ボランティア学生らの取りまとめをしていた。

調査対象者の経歴は様々で、大学も出身学部も異なり、一旦一般企業に勤めていたり（A）、卒業してから改めて教員を目指したりした者もある（D）。

3. 結果及び考察

インタビュー逐語録から明らかになった内容を結果としてまとめていく。その結果を導き出した逐語録の一部を四角枠で囲って提示するが、下線やカッコは、強調及び発言者の補足として、筆者が付記したものである。

(1) 契機となったもの

大学のカリキュラムとして教育ボランティアが単位化されているケースもあるようだが、E 小学校での教育ボランティア活動の契機になったものは、多くが教育実習の前後で、管理職から声をかけてもらう等したことであった（C）。また、コロナ禍で予定が変わったことがきっかけで教育ボランティアに参加しようと思ったケース（B）もあった。学校側が教育ボランティアを望んでいるということが分かれば、ボランティアをしてみたいと考えるケースがあり、一方で、大学の単位でもなく、学生側から積極的に連絡をしてボランティアに参加するケースは、そもそも志が高いような場合に限られると言える。

(2) 活動の内容

小学校での教育ボランティア活動は、放課後学習の補助等も多いが、E 小学校では、授業中の学級にも積極的に配置し、できるだけ普通の児童らとの関わりを持たせていた。

（他の小学校でボランティアをしていた友人は）雑用みたいなことばかりで、授業とかも入らせてもらえてないとか言っている人が多かったんですけど、…（E 小学校は）行ったら「この時間はこの授業入って、この時間はここ」みたいなのを全部結構色々割り当ててくれてたので、色んな授業が見られましたし、むしろボランティアとしてはすごく良かったな、っていうのはあって…週 1 くらいでちょっと自分も気楽に行けてたので…（A）

E 小学校以外では、教師の雑用を手伝わせる形での教育ボランティアの受け入れもあるようだが、やはり授業

の中で児童らに関わりながら補助をするボランティアの方が、満足できる活動であると言える。

二つの小学校で週 1 回ずつ教育ボランティアに参加していた B についても、E 小学校ではない方の小学校では、5,6 時間目の授業のサポートに入ったこともあったが、最初は放課後学習教室の手伝いが中心であったと回想している。B と管理職の当時の様子を確認しても、E 小学校では授業の補助に入ることができ、しっかりと子どもたちと実際にかかわったことが良い経験になっていた。児童の中には、支援が必要な子どももおり、授業中にその児童の近くで声をかけるなどした支援を行ったりしていた。

（E 小学校以外の小学校では）5, 6 時間目だけ入ってくださいみたいな。途中から切り替わってやらせてもらったんですけど、最初はもう放課後教室だけでした。（B）

B 先生と言えば、あの 2 年のね、今の 5 年の子らのやんちゃな子どもをようみてくれてたな。「あの 2, 3 年行ってくれる？」って（頼んで、2, 3 年生の学級に入ってもらっていた）（管理職）

(3) 活動で感じたこと

①一年を通した学校の動きを経験できること

教育実習でも学校現場を体験する、知るということは可能ではあるが、一か月程度の中では一部の時期の行事や授業、流れしか把握できず、そのタイミングによっては異なった印象を与える可能性も高い。C が述べているように、小学校の一年間の様子を見ることによって、年度単位で小学校の動きを把握、経験することができることは、見通しを持って教職をイメージすることも可能となる。加えて、小学校での状況が許せば、教育実習後と同じ小学校でボランティアを続ける等によって、補完的な効果も期待できる。

良かったな、と思っていることが、小学校の一年間の様子をこう、先生たちが実際にどう動いているのか、どんな風に授業しているのかを一年を通して見させて頂けたってこと…（C）

B は、漠然と感じていた授業に対する不安について、教育ボランティアをすることで、更に教員らの凄さを感じて不安に思ったようだった。それは、教育実習での経験なども含まれ、教育ボランティアの経験を経ることで、それらの不安が払拭されていった。教育実習では、短い

期間で毎日教員になるための実習として参加するため、「大変」という印象が強い一方で、教育ボランティアでは、通常の生活をしながらではあるが、週 1~2 日という時間の余裕を持って参加できることで、大変以外の楽しさややりがいを感じることもできたと言える。Bについても、授業に対する不安が大きかったが、教育ボランティアを経験したことで、楽しい経験も得ることができ、不安だけでなく、やりがいなども感じられ、最終的には教員になりたい気持ちになった。

先生たちは、こんなにも日々大変なんだな、というのは、すごく毎回行かせてもらっても感じて、こんなことを自分が、実際に教員になってできるのかな、っていう不安というか、大丈夫かなっていうのはありました。やっぱり授業は、毎時間毎時間違う教科でってなったら、本当に毎日違うことを教えていけるかなって、授業が一番不安でした。現実をこう、目の当たりにするから…漠然とはわかってたんだけど、なかなか難しいな—と感じました。(B)

実習と、なんかボランティアで、なんかやっぱり気持ち的に全然違う、なんか実習行かせてもらった時は、やっぱり大変だなっていうのがあって、その後ボランティアで楽しい経験もさせてもらったので、なんかまあ、足して 2 で割って…やりたいと思いました。(B)

また、実際に教員になると自分のクラスや学年が中心となる関わりになるが、A が述べたように、教育ボランティアの段階では全学年の子どもたちと関わることができ、様々な学年の様子を見ることが出来る。

…ほんとに全学年関わったんですけど… (A)

②教師から感謝されることや、やりがい

教育ボランティアに参加したことで、インタビュー協力者がどのような精神的変化があったのかについて考察する。

Aのように、児童らと接している中で、教員らから感謝されることがあり、教育ボランティアをしたことが役立つという気持ちになったことが伺える。Cについても、自分自身は大したことをしていたつもりがなくても、教員からの感謝の言葉で、自分自身のやりがいに繋がっていた。Aについては、後述するが教諭として就職した後、改めて教育ボランティアのサポートが教員の気持ち

を楽にしていたかを認識するようになっていた。

実際にはどう思われていたのかは分からないのですが、低学年の先生には、「そこ見といてくれてありがとう」とか、やっぱり感謝されることが多くて、…大したことをしたつもりじゃなかったんですけど、手のかかるクラスとかあったりもしましたし… (A)

担任の先生が「本当に居てくれてありがとう」みたいなことを言って下さって、…なんか一人を誰かがついていてっていうのは、まあ、週に 1 回のことやったんですけど、こうまあ役に立てたんじゃないかなとは思っています。(C)

教員側も教材作りの補助などをしてもらえることで、その感謝を教育ボランティアに態度や言葉で伝えており、D のケースにもみられるように、その循環の中で教育ボランティア自身も「自分が役に立っている」と感じられていることが伺える。

なんかものすごく、クッキーくれたり、そんなくれるようなことしてないのに。教材作りというか…本当にプラスになったな、とは思っています。(D)

③教員との関わりを通して、教員を身近に感じる

前述したように、一年間の様子や職員室で教員がどのように過ごしているのかを知ることができ、現職教員に対して身近に感じることもある。遠い目標であった「教師」という仕事が、イメージだけでなく具体的に捉えることができ、Cのように教員と様々な話をする中で、大変なことも、良いことも直接聞くことが出来ている。マスメディアなどで得られる情報は否定的なものが多いが、身近でやりがいや、本当の大変さを見ることで、自分で判断できる情報を得られていた。

やっぱり職員室で、先生がどんな風に過ごされているのかも、やっぱり知れましたし、教育実習だけだったら、その自分の学年の事しか分からなかったのですけれど、いろんな学年に入らせて頂いたことで、沢山の先生と話をすることが出来たので、お陰で教師になった時の戸惑いは少なかったです。(C)

④教育ボランティア経験での変化

教育ボランティアを通して、自分がどのように変化したかを述べていた D は、最初は受け身だった姿勢が、徐々に自分から積極的に教員のサポートに入り、②の項

目とも繋がるが、そのサポートをしたことによって感謝されているという認識を持っていた。

A～Cについても、管理職からの評価でも、最初は手探りで支援する子どもたちと触れ合っている様子だったのが、継続的に触れ合うことで対応力が増し、最終的には教員からも信頼されるようになっていた。

最初の方は結構授業を見て、なんか勉強させてもらって、っていうなんか受け身的な形でボランティアしていた部分が強かったんですけど、いろんな先生と関わったりしているうちに、やっぱりこう仕事量がすごく多いのは知っていたので、じゃあそこで教材作り…結構自分から、先生方の職員室の机のところに行って、「明日の準備とかあったら手伝います」とかで、色んな助けと言うか、まあ、出来たと思います。…単純な作業なんですけれど、それも出来たら、その先生方の手助けになるかなと思ったので、秋ぐらいからは結構そういうのを意識して取り組んでいけたかなという思いはあります。(D)

(4) 教職への意欲

教育ボランティア経験を通して、更に教員になりたい気持ちが高まったり、教員になるか迷っていた気持ちがあったりしても、教員を目指す気持ちになっていた。Cの発言にみられるように、ボランティアの活動が週1～2回、と負担が少ないことや、期間が空いていることによって、子どもの成長がより感じられてやりがいに繋がるということも分かる。

今はバタバタしすぎて教員の生活ってって思っているところありますが、ボランティアの時は毎回楽しかったですし、一週間ごと、なんか期間が空いているからこそ、子どもの成長がより感じられることがあったので、何かそのお陰で、より、こう先生って本当にいい職業だなと思うことが出来たので。(C)

ボランティアを通して教員になりたいって気持ちは高まって、ほんとに自分が思っていた以上の学校現場というか、小学校を目指していた自分は間違っていなかったって思っていた一年間がありましたし、すごく実践とかも観られたので本当によかったです。(D)

ボランティアをし始めた頃は教員を目指していなかったというBについても、教育ボランティアを経験して、

やはり教員を目指したいという気持ちに変化していた。

(最初教員志望ではなかったけれど) やっぱり (ボランティアに) 行かせてもらって、子どもたちと実際に関わって、なんかすごいこの子たちの将来を手助けできたらな、という感じで思って。やっぱり教員になりたいなという風に思いました。(B)

(5) 管理職による活動への評価

①受け入れ後の児童らの変化

教育ボランティアの受け入れは、E小学校の児童たちにも影響を与えていた。当然、教員らが個別で対応しきれない子どもたちが頼れることは予想ができるが、教師ではなく、保護者でもないという位置にいる教育ボランティアになら、頼れるということがみられた。児童らにとっても、学校に来てくれる貴重な存在だったことが分かる。

先生でも親でもない、距離の近い兄や姉の存在だからこそ、寄っていったって子もいたし、ちょっと不登校気味だった子が、(教員ボランティアの)〇〇先生が来ている時だけ、学校にちゃんと来たりしてね…。(管理職)

②教員らや学校全体への変化

言うまでもなく、学校にとっても教育ボランティアの力は重要である。学級運営の中で補助をしてくれる一つとしての存在だけでなく、教員らの意識や学校全体への影響がみられた。

火曜と金曜は彼らが来てくれる、っていう安心感があった。その信頼感があったかな…。

(教育ボランティアの)〇〇先生が来るから学校にくるという児童がいるのは、もちろん僕ら(現職教員)がそうでないとダメなんだけど、それはホント、すごかったなあ…って。

教職員みんな、彼ら(教育ボランティア)が来てくれるのが楽しみで、明るくなるんですよ。元気になって、彼らのパワーにすごく励まされて、来てくれることを待ち望んでいたところがあったかな。(管理職)

例えば、教員らは教育ボランティアが来る曜日には、学校全体の雰囲気が明るくなったり、少し力が抜けて安心するような状況があったりした。多くの仕事を抱え、児童らにも目を配らなければならない状況で、少しでも

任せられるという信頼の持てる教育ボランティアの存在は大きかったことが伺える。教育ボランティアが来てくれることを待ち望みつつ、児童の為だけというより、迎える教員に対しても良い影響を与えていたことが分かる。

そして、教員が教育ボランティアから尋ねられたり、質問されたりすることで、自分自身の考えをまとめたり、自分の児童への対応をふり返ったり、言語化することにも繋がっていた。

現職教員にとっても、身近で憧れられる存在であることの刺激や、手本とならなければならないという意識が働いていたと思われる。また、教員という仕事に対して、も改めて向き合う機会になったと考えられる。

(教育ボランティア) 彼らから質問とか、色々聞かれたりすると、聞かれた方も考えて、言語化するから…。若手(教員)への影響が大きかった…。新卒で先生になった先生達も、教員を目指すボランティアから刺激を受けていて…。(管理職)

また、教育ボランティアらが教員採用試験の受験を目指すことから、採用試験に向けて、みんなで応援しようという雰囲気が醸成され、それが既に教諭として働いている教員側の刺激にもなっていた。現職教員らにとっては、教職を目指し教員採用試験を受験した頃の気持ちを思い出して、気持ちを新たに出来ることにも繋がったとも言える。

5月6月とかは、教員採用試験もあったので、もちろん講師の人も含めて、みんなで(教員採用試験)合格しようっていう雰囲気が大きかったかな、と。(管理職)

小学校の学級運営をしていると、担任がクラス運営を仕切って、他の人に自分の授業を見られたり、他の人に入られたりすることを嫌がるケースもある。しかし、E小学校では、教育ボランティアが様々な授業に入ることによってオープンな雰囲気になっていたことが分かる。それが、何か困った時に相談できる、ということに繋がると考えられる。

E小学校でも元々は教育ボランティアを受け入れていなかったが、低学年から徐々にボランティア受け入れて、そのケースが成功体験となり、多くの教育ボランティアの受け入れに繋がっていった。教育ボランティアの出入りがあれば、教員側も自分の授業について意識して作り、教育の質の向上も期待できる。

学生ボランティアを入れた3年間で、「授業見られても良いよ!」という雰囲気になったけど、他の学校では、学生(ボランティア)を入れる文化は無い、って感じてるところもある。授業見られたくないって気持ち強いんだろうね。

(E小学校では)ボランティアを受け入れてなかったところから、低学年中心に徐々に来てもらって、ちょっと大変だった学年で助けてもらって感じて、広がっていったっていうものもある。(管理職)

(6) 活動後の影響

教育ボランティアを経験したA~Dは、いずれも教員採用試験に合格し、小学校教諭となった。教育ボランティアの経験が、教員になってどのように影響したかをみていく。

Aの発言のように、子どもへの接し方や授業の仕方等を学んでいたことが役立ったとする直接的な影響と、「支援の仕方には色々な方法がある」ということを経験したことで、幅広く対応を考えることができるようになっていく間接的な影響がみられた。

講師経験、ボランティア経験も入るんですけど、まず子どもへの接し方と授業の仕方、色んな先生の授業とか、対応の仕方とかを見せてもらっていたので、この低学年やったらこの方が良いかな、とか、声の掛け方のスピードとか、話し方の速度とか、声掛けの仕方とか、そういうの結構、何も知らない状態でやったら、ただ注意したり怒ったりっていうのが今より多かったと思うんですけど、怒ってばかりじゃなくて、ここではこういう声掛けをしたら良いかな、みたいな、こういう風に話して聞けば良いかな、とかを結構いろんな先生のも観られたので、そこはほんとに今でも役立ってる。…こういう方法があるんやな、とか、なんかこの子は僕のやり方があってないな、とか、そういう判断が出来るので、じゃあ今度、あの先生のこんなやり方してた(から試してみよう)、っていうのも少なからず使えるな、っていうのはあります。(A)

Cもまた、教育ボランティアで経験した支援の経験自体が、実際の教員として勤めた際にも役立ったとしていた。じっくりと支援が必要な児童にかかわってきたことで、最初から抵抗なく対応を考えることが出来たといえる。

教員として現場に出ると、一日一人の子どもに付きっきりで対応することは時間的にも厳しい。しかし、支援

が必要な子どもと一緒に過ごすことで、ゆとりを持って向き合ったり、考えたりする経験ができたと言える。その経験が、実際に教員になった時にも、経験として生きてきた事例である。

支援が必要な児童に、一日つかせて頂く体験をさせて頂いたことで、今、自分の小学校に支援が必要な大変な子がいるのですけど、最初から、あまり驚かずに、こうスッとこんな支援が必要かな、って考えられるようになったのは、ボランティアの経験があったからこそかな、と思っています。(C)

Dについても、教育ボランティア経験をした1年間で自分に強い影響を与えたとふり返っていた。

本当にあの運と縁に感謝の一年でしたし、あのボランティアの経験がなかったら、今の僕はないと思っているので…。(D)

4. おわりに

教育ボランティアを始めたきっかけは、多くの場合は教育実習について相談に行った時に声をかけてもらった、というような些細なものであっても、定期的な教育ボランティア経験によって子どもたちとの距離が縮まるだけでなく、小学校教員らを支援出来ていることのやりがいを少なからず感じていたことが明らかになった。

また、教育ボランティアの間に多くの教員の授業や子どもへの対応などを観ることによって、近年指摘されている教員の指導力不足(保住, 2007)の改善にも寄与できる。また、教員を目指す側のメリットだけでなく、教育ボランティアを受け入れた学校側では、教育ボランティアの若者からの刺激が相乗効果を生み、学校全体の雰囲気が良い方向へ向かうと同時に同僚性の構築に繋がっていた。

一方で、まだ外部の受け入れを好まないケースや、自分の授業を誰にも見られたくない、と考える教員も少なからず居ることも否定ない。そして、受け入れる側の学校や管理職の考え、価値観によっても状況が異なり、更にボランティアとはいえ、保険の問題等もある為、ある程度の予算を準備できるか、という予算の問題などもある。

言うまでもなく、本研究はE小学校での実践事例であり、その結果は限定的ではあるが、ここから得られた知見や実践における利点、課題等については、他の学校においても意義のある情報になると確信している。

今後、学校側の理解と教員養成側の実践への意欲とこれらの連携が、より良い教員ボランティア実施を生み、

教員の質向上、教職を目指す学生の増加に繋がると考える。

謝辞

本調査に協力してくださった方々にお礼申し上げます。また、データ入力については、赤木優菜さん、谷昊埜さんにご協力頂きましたことをお礼と共に付記します。

注

1 文部科学省が行った「教員不足」に関する実態調査(令和4年1月)による報告では、育児休暇者や病気休暇者、特別支援学級数が見込みより増えたという理由が多く挙げられていた。

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoin/mext_00003.html (2022.12.27 確認)

2 文部科学省(2005)教員養成部会_教員免許制度ワーキンググループ(第5回)平成17年5月12日実施_配付資料より「参考資料 2_教職課程における体験活動やボランティア活動の実施例」より。

3 次世代教員養成プログラム TEST は、一般社団法人 lightful による、教員を目指す学生向けのプログラムである。埼玉県戸田市教育委員会と連携し、戸田市内の学校に教員を目指す学生を派遣し、学校現場の課題解決や教員としての1年目に感じるミスマッチを無くすことを目指すとしている。<https://test.lightful.jp/> (2022.12.27 確認)

参考文献

- (1) 保住芳美「教員養成におけるボランティア活動の有用性—福祉学習サポーターの実践から—」『川崎医療福祉学会誌』Vol.17, No.1, 2007, pp. 163-168.
- (2) 蓑輪欣房「教員養成における体験活動への期待と課題」『育英大学研究紀要』第3号, 2021.3, pp. 33-41.
- (3) 後藤直「大学・小学校・地域の連携による地域教育実践」『佛教大学教育学部学会紀要』第2号, 佛教大学教育学部学会, 2003.3, pp. 189-199.
- (4) 石崎達也・鈴木達也「「学習支援ボランティア活動」を通じた教員養成モデルの構築について」日本教育学会第75回大会要旨集, 一般A-14, 教師教育①, 2016.8, pp. 170-171.
- (5) 高田康史・堀田治「教員養成課程における地域小学校との連携事業を通じた学生育成に関する研究」『吉備国際大学研究紀要(人文・社会科学系)増刊号, 2017, pp. 93-98.